

せたかむい

発行 古平町史編纂室
文化会館 842-2590
第196号 平成18.1.1

年表で読む 古平の歴史

《101》

果樹園芸

リンゴ④

◇病虫害とのたたかい
大分古い話ですが、「農業は雑草とのたたかい」だと言った人がいます。実際に広い畑を耕作している人の実感です。しかし、園芸・特に果樹栽培となるとこれはまさに病虫害との戦争？です。農作物は一般にそうですが、中でも過保護に育てられてきた園芸作物は、病虫害にとつての恰好

の獲物です。また、昭和二〇年代の頃でも「人の結核、稲のイモチ病、リンゴのモニリア病を無くした人は大恩人だ。」という話もありました。

そして現在では、結核はすっかり下火になり、イモチ病（稲熱病）もその影をひそめて、少しでも発生の際候が認められると新聞にも出ますし、モニリア菌もどこへいつしまったのか名前を聞くこともありません。

モニリア菌は若葉が出るとそれを腐らせ（葉腐病）、花が咲くとめしべの先に付いてやがて実を腐らせる（実腐病）という始末の悪い病害を引き起こします。

しかし、病害よりも先にやって来るのが害虫です。害虫にやられて弱っている樹を狙って病害が

襲ってくるのです。

地球上の動物の種類は約一二〇万種、その三分の二が昆虫で、これがすべて害をするわけではありませんが、一般にムシと呼ばれている大きな仲間に含まれていて、繁殖力も強く、これではとても人間が素手で立ち向かつてかなうような相手ではありません。

連載している『高野名幸作日記』にも

「樹の下にデントを敷き、樹に登った人が枝をゆすつてムシを落とし、穴を掘つて埋めたり焼き殺した」、「ムシのいる樹の皮を削り取って薬剤を塗った」、「一匹ずつムシを手で取った」

「雑草を焼いた煙で追い払った」などなど、「これでは今年の収穫は半作か：」、「また、「今年のリンゴは上作！」などと、病虫害はリンゴ栽培の死命を制

するほどの大きな要因でした。

大正年代は、リンゴの先進地といわれる余市地方でもリンゴ園の転作や廃業があり、ようやく栽培方法などが研究されるようになり、人手による防除から薬剤散布による駆除が取り入れられる時代でした。 △続く▽

← 浜町・高野名リンゴ園の収穫風景
一本の樹から千二百斤収穫記念
大正六年九月一日撮影



謹賀新年
平成十八年元旦
古平町史編纂室
室長(総務課長) 成田昭彦
嘱託 村井芳男



大正一三年 一 続

▼八月一三日

起床六時、今日は盆の二三日だ。朝食前にトシを連れ、父も一緒に、お盆用花、キキョウ、ユリ、キクや、キウリ、リンゴ、キミなどをとり、農園へ行く。リンゴも58号はかなりの味だ。帰って朝食後、仏前に供えるものの支度をする。夕方六時頃、家族一同で墓参する、こうして家族睦まじく墓参できるのも先祖のお陰だ、大いに奮励せねばならぬ。あちこちのお参りをし、寺参りをして帰ったのは八時、仏前で修証義をあげた。のち戸外で涼んだが、夜の風は冷たいくらいだ。お盆が過ぎると早秋風が立つのだ。畑町の方からは盆踊りの歌と太鼓の音が聞こえてくる。

▼八月一四日

暫くの干天続きで畑作物の枯れたところが沢山ある。朝五時頃ようやく雨が降り出した。作物にとつてはまさに干天の慈雨だ。九時頃になって晴れたが、今日一日くらい降ってほしかったが惜しい。雨後は急に涼しく、寒暖計は七二度F(約二二度C)、このくらいなら過ぎし

やすい。父は浜町のそれぞれの家に仏参に行く。妻は新地方面の仏参に行く。私は、森川へ行く。綿網の注文があり二個荷造りする。夜、困の一行と墓参に行く。本年から始まった墓地の外灯は明るく実にきれいだ。盆中、こんなに熱心に墓参するところはめつたに見られない。祖先を敬う古平の美風だ。伝えていきたいものだ。

▼八月一五日

高野名幸作さんの日記から

《107》

当時の世相を見る

起床六時、盆中で皆晴れ着を着てあちこちと墓参に忙しい。妻も〇、伊藤さん等へ行く。墓参の

人がたくさん通る。午後四時から小学校で校門の決算報告があり、校門の写真も一緒に入っていた。終わつてから校門前で記念撮影をし、六時半帰る。八時頃墓参に行く。墓地にも外灯がついて賑やか。冷風が静かに吹き散歩には実に心地よい。十五夜の月もこうこう。

▼八月一六日

去る一四日のひと雨の後はずつかり涼しくなった。寒暖計も七二度F(二二度C)に下がれば実にしのぎやすい。菊村さん去る一二日、小樽へ船でリンゴを運んでいったが今日帰る。安栄丸で久行きアバ縄五個と網二個送る。盆も一六日になり仏さんのお供え物を下げた。坂下へ墓参に行きのち新地方面へ自転車で行く。司、佃、岡などに寄り

一二時帰る。盆中なので晴れ着の人が多い。夜、文治、吉治を連れて

墓参するが冷風が秋らしい。帰る港町弁天さんの宵宮参りに行く。たくさんの人出で賑やかだ。本陣の浜から遙か小樽方面を見れば、十六夜の月が輝き波に映して実によい景色だ。墓地の電灯が赤、青、白ときれいだ。

▼八月一七日

起床六時半、天気快晴、梅野老

人、今朝六時頃亡くなられたとのこと。大した病氣もなく、苦痛もなく大往生された由、幸運な老人というべきか。七時頃弔いに行く。しばらく話したが帳場の方を手伝つてくれと依頼され、通知はがき、電信、その他いろいろ事務をして正午頃家に帰り、また二時頃手伝いに行く。夜、父が通夜に行く。

▼八月一八日

天気快晴、盆中なので町は賑やかだ。八時頃から梅野さんの帳場の手伝いに行く。午前中の用向きは寺方五軒へ招(い)状、行列帳、休憩所立看板などを書く。どうにか字を書ければこうゆう時に手伝いになる。書は実用のほかに精神修養上も大いによい。

▼八月一九日

快晴、今日は梅野老人の葬式当日、八時頃から行く。一〇時出棺私は白衣で棺側について送る。父も送りに出る。ずいぶん賑やかな送りであった。正隆寺さん弔辞を読む。これによれば亡き老人は佐渡から江差に渡つて行商をし、古平に来て三四歳にして開店したとのこと。ずいぶんと古い話だ。親類も良し、家族にも恵まれて病氣もせ

ず往生したのは実に幸運の人だ。五時骨拾い、七時から忌中引き、九時に帰る。今日は近來にない暑さであった。盆踊りの太鼓の音が賑やかだ。リンゴ58号を菊地屋さんへ三千斤程売る。

▼八月二日

今日大阪のおじさん、常雄さん、三郎さんと、幸治、文治、私の六人で積丹へ陸路出かける。四時起床、五時出発した。美国へ着いたのは七時頃であった。⑤で休み氷水を馳走になる。七時半出発、茶津の坂にかかった辺りから太陽が輝き、蒸されるような暑さであった。

▼八月二五日

今日積丹から陸行して帰る。

▼八月二六日

昨日積丹から帰り相当疲れたが、今朝は割合早く七時に起床した。去る二三日あたりから急に涼しくなったようで、今朝などは初秋の風が肌にさわやか、単衣も白地よりセルくらいがちょうどよい程だ。留守中の書面、その他を整理する。昨年から心掛けていた屋根のトタフきのこと、一昨日あたりから中であつて三人でふき始め、今日で半分くらい出来たが立派になった。

八つ切りで坪当り四円二〇銭、四つ切で三円八〇銭、三〇〇円もかければ立派になるだろう。妻は二階で土用干しをやる。農園のリンゴ58号、毎日二、三円づつ売れている。銀行へ行きカレ網代金を替で払い込む。ヨに寄り話をして五時帰る。小樽では本日港湾落成式があり、若槻内務大臣が臨席し盛大な祝宴があるとのこと。

▼八月二七日

快晴、初秋の空高く晴れ渡り心地よい時季となつた。午前中は留守中の書面、その他の事務を執る。屋根のトタンぶきもだいぶ出来た。熊さんは未明から農園行き、草取りやらリンゴの小売で忙しい。58号は毎日のようによく売れる。阿部と大久保が、14号を五銭で売ってくれと来たが、まだ玉が十分でないで四、五日見合わせることにした。五、六日前から支店の農園の池にツルが下り遊んでいると、見物人で大混雑とのこと、珍しいことだ。

▼八月二八日

起床七時、朝夕は涼しく丹前一枚では寒いくらいだ。午前中は帳簿調べ、目録書きをやる。本年は練刺網意外に不漁のため、一七、

五〇〇余円の貸し方に対し、目下四、〇〇〇円程の残金がある。二月までに一、〇〇〇円入金するとして三、〇〇〇円は明年へ繰り越しになる。大漁でこの残が全部回収されていたら実に万歳であつたが、思うようにはならないもの。しかし仕入先には一銭の借りも無く、外に借入れも無くこの不況を過ごせるのは、まだ幸福と感謝せねばならぬ。大阪のおじさん、今日七時頃入舸から帰る。積丹旅行の面白かつたことを語る。14号が欲しいというので、夕方農園へ行つたがまだ少し早い。リンゴ小売商七、八人が来て忙しい。

▼八月二九日

今日はこの頃では一番の暑さだ。二十十日も目前に迫っており、雨模様の子供がむし暑い。月末の集金に九時頃から浜町方面を廻る。二円か三円の集金に五、六度通つても入金がなく、気の毒とも思わず理屈をばかりを並べる女がいる。商人は腰の弱いものとつくづく感じた。一時過ぎ帰る。昼食後、美国又から二〇個余り受取りに来る。自転車で国倉庫へ行き渡す。のち入船町、港町方面を廻りヨに寄りし

ばらく話をする。重久さん明朝札幌へ行くとのこと、幸治は明後日の予定だ。午後三時頃から沢江方面の集金に廻つたが、どこも男は出稼ぎだ。カムチャツカ、函館、山方面といろいろだ。

▼八月三〇日

長らくの晴天続きも昨夜から降雨があり、今日は一日中降り続く。この雨が二、三回に分けて降つてくれれば畑作物にもどんなにか良かったことか。何よりも照り続きや降り続きには閉口だ。稲作は各地とも豊作だが、畑作は不作とのことだ。月末なので合羽かっぱを着て十へ行く。どこで聞いても不況の話ばかりだ。松田やツではよいや切り切れなくなつて整理するとのこと。今年に入つて㊦、㊧、㊨、㊩、その他あちこちで整理したところがずいぶんある。五、六年前の好景気時代から見れば雲泥の差だ。幸治は明日小樽へ行くので行李にいろいろなものを詰めて支度をしている。妻は畑へ行きキミ、リンゴを取つて来てうどんの馳走だ。親のあるうちは幸せだ。雨がこのまま降り続けば、また土場辺りは水騒ぎになるだろう。

▼八月三十一日

起床六時、幸治が小樽の学校へ帰るのいろいろ支度をする。幸い天気になり海も静かなので都合がよい。今日は禅源寺祝聖会主催で、泥の木滝の景勝を観音滝と命名する式がある。探勝をかねて出かけるべく、向かいの電気会社高橋さんを誘って行く。一行二〇余名八時に出発、九時泥の木着、四〇分程して観音滝に着く。割りに道路は良い。滝は二丈五尺程あり、昨日の大雨で水勢が殊に激しく壮観だ。周囲の景色もよろしい、秋の紅葉の頃はよいだろう。観音経をあげ、のち聖寿と観音滝の万歳を唱え、川で獲った雑魚のだしにナス、ネギなどを入れたおつゆが出る。ほかに鍋料理もあり酒もすすむ。十分案しむ一時出発、途中、阿部、田、支店、その他のところに寄り四時帰る。のち小樽に送るリンゴ三箱を荷造りする。

▼九月一日

禅源寺で祝聖会の例会があるので四時起床、まだ暗かった。四時半経本とリンゴを持って出かける。東の空を見ると雲が赤く色どられてい、静かな朝の景色は何ともい

れぬいい気分である。五時から読経を始めて六時に終る。のち和尚の部屋で昨日の観音滝探勝の話などし、今後のことについて協議する。池ツルの見物に集まって来ている。七時に帰り朝食はおいしい。正午、美国(×)からアバ縄丸九受け取りに来る。自転車で入船町へ掛取りに行つたがなかなか集まらぬ。(田)、藤井、(ト)などに寄り話をし、五時に帰る。夕食後、相坂へ行き話をし八時帰る。14号一、五〇〇斤程、初めて小樽へ積み出した。二百十日なれど平穩無事、今日はあの東都大震災の一周年である。

▼九月二日

朝夕は涼しく爽やかすくなつた。先日までは白地に扇子、氷水と言つていたのに早初秋の候となり、メリヤスのシャツにセルの単衣でちょうどよい。昨日、祝聖会の読経に参加すべく四時頃起き、一一時過ぎまで起きていたので、今朝は八時過ぎまで朝寝す、こんなことではまだ修業が足らない。大いに奮発を要す。徐々に早起きの習慣を養わねばならぬ。この頃のイカは珍しく大きい、漁に不同があるようだ。イカ漁のある日は浜も景気が良い。

農園では58号がいよいよ終りになり、あと二〇〇斤程になった。一般にリンゴは品不足で値上がりしている。傘兄さんとヨシさん、子供の手術のため小樽へ行つていたがこの日陸路で帰る。「平」君の近況を聞いたところ一生懸命家業に励んでいるとのこと、どうか成功して、国許の老母を始め一同を安心させたいものだ。久しぶりで夜、手習帳などを見る、一〇年くらい前はういぶん熱心にやつたが、この頃は怠りがちだ。気候のいいこの時期、毎日やることにしよう。戸外でゴロゴの声、初秋を告ぐ。

▼九月三日

起床六時、初秋の節となり一年中で気持ちのいい時だ。明日は大澤道議当選祝賀会があり、会費一円五〇銭とのこと。私は馬車屋を連れて(田)の倉までアバ縄一四個を引き取りに行く。今朝、イカ漁一二〇から三〇〇くらいあつたという。少し漁も上向いてきたが、引き続き大漁であつてほしい。帰り司でアジウリを馳走になり、一〇時帰る。自転車で農園へ行く、58号もいよいよ今日で終りだ。スイカの見事なのが、一四、五個なっている。

熊さんリンゴ売りのかたわら12号、旭の袋外しなどをやっている。午後から浜中方面の掛取りをし、四時頃自転車で沖村へ行く。多くの家はカムチャツカなどへ出稼ぎ中、月末には大分帰るとのこと。沖村街道を自転車で走つたが割りと道路はよい。景色もいいし気も晴れ晴れする。

▼九月四日

今日は祝賀会当日だ。朝五時半起床、浜風に吹かれながら港町弁天さんへ参拝する。のち山の中腹まで行き町内や海を眺める。何ともいわれぬ景色だ。私等が子供時代はこの下に一時学校があり、よく山へ遊びに行つたものだ。早三〇余年の昔だ。古平に将来鉄道がつき、築港が出来て小樽の副港として活用するようになったら、この山の辺りは住宅地として、また別荘地として価値ある場所になろう。六時に帰る。イカ大漁で五、六百はとつたという。散髪してから一一時(田)、司等と共に会場の公園へ行く。赤い前掛け姿のねえさん方が馬車で行く。続々と公園に詰めかけ正午から始まる。祝辞、挨拶などが、余興として芸者さん達

の手踊りが始まる。折詰、酒に肴も出て、それぞれ思い思いの二、三、四年に陣取り大いにやる。五時頃、飲を尽くして終る。北浜君と一緒に帰り、それから美登利に行く、こゝも満員だったが大いに騒ぎ八時頃帰る。近來になく酔った。

▼九月五日

昨日の大澤道議祝賀会、近來にない大盛会であった。飲み党連は大いにメートルを上げたようだ。私等も会場から美登利へ行き、家帰ったのは記憶にない。今日はもう船酔いでもした後のよう気分が勝れず困った。美登利へ帽子を忘れて取りに行つてもらった。暴飲暴食は確かに悪い。去る天長節の日に、泥の木観音滝へワラジ掛け握り飯持参で行つたが、あれが本場の清遊だ。今後は大いに慎まねばならぬ。イカ大漁で道具、ロープ類がよく売れる。夜七時から本で部落会の集まりがある。昨日の祝賀会のこと、皆もずいぶん酔つて失敗談があつたようだ。時計、ステッキ、帽子など無くした者、道端で倒れた者などいろいろのことだつた。

▼九月六日

秋晴れの好天気、去る四日の酒のせいで昨日は気分が悪かつたが、ようやく回復した。イカ漁、今日は五〇〇三〇〇くらいとのこと。イカ道具ポツポツ売れるが他の道具からみれば金額は少ない。困すゑちやんの三回忌なので妻が寺参りに行く。小樽の元老で元代議士の金子元三郎氏が、漁場視察で古平へ来られる。町の有志が馬車で各所を案内し、夜六時から禅源寺で講演会がある。私も鶴間君と聞きに行く。広谷君が所感と題して法律問題について話した。九時に帰り休む。

▼九月七日

起床七時、日増しに秋景色となり心地よい気候だ。子供等は日曜日なので沢江の浜でヒルカイ、ツブなどをとりに行く。沢山とつて喜んで帰つて来る。午前中自転車新地まで行く。イカは先頃より薄漁で五〇〇二〇〇くらいだ。帰り司に寄る。帰ってから農園を一巡する。12号、旭などは二、三日前に袋を外したので、色つきがよく見事だ、12号は近來にない上成績のようだ。写真にでも撮つておきたい。これが庭園にでもあつたら見事な

らん。花嫁も大きいのが苗木二本に二、三〇個なっている。三、四年したら良い樹になるだろう。スイカ、トマト、カメナシ、モモもだんだん味がよくなるだろう。秋の農園はどこを見て楽しんだ。夕方、港町の姉が来て妻と農園へ行く。

▼九月八日

昨夜十二時頃から雨が降り出し今晩まで続いたが、起きた頃には晴れていた。イカは中漁、曇天のため安く一〇銭に五杯だ。一〇時頃から快晴になり、久し振りに四郎を連れて浜に出て見る。何時見ても浜辺からの景色は雄大だ。大謀では小カツオが沢山とれたとて、カツオ節製造をしているところもある。本陣の浜では川崎船から木炭や石炭を下ろしている。昼食後、農園行き。久し振りでワラジ掛けで働く、枝切りや草取りをやる。ユキちゃん四郎が来たので、スイカを一つ割つてみたらずいぶん赤くなつていておいしい。帰り川畑のアユ孵化場を見に行く、元気のよいアユが五、六〇尾見える。まだほんのすこししか孵化していないとのことだ。夕食後、禅源寺で観音滝祭りの準備があるので行く。

▼九月九日

起床五時半、この頃では早起きであつた。洗面早々海岸を散歩したが、初秋の浜辺はことに気持ちが良い。イカ漁も中漁になった、二〇〇三〇〇が多い。九時頃農園へ行く。美国から馬車が来て14号を一斤五銭で二〇〇斤売る。19号、26号などの袋外しをやる。秋の農園はどこを見て楽しい。四時頃、妻と子供等が来てスイカをもぐ。どれも真つ赤でおいしい、子供等は大喜びだ。オランダ茶豆、キミ大根などをとり夕方帰る。蚊もかなり減り涼しく寝やすくなった。

▼九月一〇日

昨夜九時頃から雨になり、一〇時頃には雷光と雷鳴が激しく豪雨になった。イカ漁もこの雷雨で逃げ帰つて来た由。豪雨も明け方には止む。今日小樽の菊地さん、14号をもいで積んで行くとして畑へ行く。一〇〇〇斤程もぎ、内二〇〇斤は宮古さんへ売る。私は倉でたんすの衣類や道具などを整理する。雨のせいかな近ごろでは一番の冷気だ。蚊もいなくなったようであまりよい。夜、
 図の通夜に行く。

□青年団活動の組織化

文部省が各地にある青年団体をまとめ、強力な活動のできるような組織をつくるため、明治四三年、名古屋市中で全国青年大会が開かれた。

大正四年には文部省と内務省は、さらに積極的に活動を推進する必要があるとして訓令を出した。主要内容を挙げると、

勤勉、よく国家の進展を担う精神と素質を養成することは、現在の最も緊迫した課題である……」
 続いて各市町村には、青年団体の設置についての基本的な方針も指示された。これによつて青年団の設置と育成は、自治体にとつても緊急な業務となつた。

□平凡青年団の結成

先の指示もあり全国的に青年団

二・野村常太郎・興津房智の四人の合議制とした。団旗は大正八年の浜町大火で焼失した、と記録にある。

□盛んな青年団活動

運動競技などには広い海産干場が利用された。大正六年、青年団と古平尋常高等小学校同窓会、帝国在郷軍人会古平町分会が合同で、武術・陸上競技連合大会が開催された。軍事教練、演習、マラソン、綱引きなどもあり、大観衆を集め、大会は翌年も行なわれた。

大正一〇年、古平尋常高等小学校の石川訓導を講師にして、厳島神社裏手の丘(通称・弁天さんの坂)でスキー講習会が開かれた。受講者は三〇人ほどであったが、副杖ストックを持っていたのは二、三人であとは一本杖であった。古平でのスキーは、小樽区裁判所古平出張所(登記所の金子書記が最初であった)といわれている。

この頃、子供達は根曲り竹を組み合わせて作った竹スキーで遊んでいたという。

大正一四年にはスキー大会も行なわれ、滑降姿勢や距離、ジャンプ



「青年団活動の成否は国運の發揚地方の發展に大きくかわることなので、青年団体の指導に努める」とは、現在の情勢から見て最も肝要なことである……青年団体は青年の修養の場であるが、健全なる国民、善良なる公民としての素養を得ることも……従つて団員に忠孝の本義を体得させ、品性の向上を図り、体力を増進し、実生活に適切な知識を学び、剛健で

結成の動きが広がった。大正四年、三浦銀治、津田精らの同級生が中心になつて、一〇人余りで平凡青年団を結成し、三浦銀治が団長となつた。その頃、畑方面にあつた古平青年勤労組合が解散したことから参加者が増え、名称を協友会と改めた。

協友会の会旗は紫地に月桂樹を配した図案であつた。三浦団長が入営した後は西下喜一郎・仲谷昇

などで争われ、函館毎日新聞社から最高得点の優勝者にカップが寄贈されている。

□古平青年団を結成

大正九年、組織の拡大を図るため協友会を解散し、古平青年団を結成した。発会式を古平尋常高等小学校で行ない、団長に中村重次郎(小学校長)、副会長に北浜嘉雄(助役)を選出した。青年団活動も団員の自主性を尊重しながらも、



← 武術・陸上競技連合大会



自治体にとつてその活動を図ることは行政としての任務でもあった。古平青年団は全町的な組織であったので地域が広く不便な面もあったことから、沢江地区を第一分団・分団長菊地弥三、浜町方面を

← 厳島神社裏のスロープで行なわれたスキー講習会

第二分団・分団長北浜嘉雄、新地方面を第三分団・分団長山口正治を任命した。大正九年六月、古平青年団・古平双輪倶楽部(自転車クラブ・帝国在郷軍人古平町分会)の共催で、入船町①山口海産干場で大運動会を行なったが、このときの参加者は七百人をはるかに超えたという。

大正一〇年、古平尋常高等小学校長でもある古平青年団長中村重次郎が、内務・文部両大臣の訓令により、町内の各青年団が結集して連合青年団の結成を提唱した。

当時町内には古平青年団・沖青勇団(沖村・泥の木青年団(畑方面)新友会(沢江村)・自彊団(群来村)などがあり、それぞれの地域を活動の拠り所としていた。

同年二月、古平尋常高等小学校で連合青年団の発会式が行なわれ、団長に古平町長三上良知を推薦、副団長に中村重次郎を選任し、幹事に奈良良樹(小学校教員・松岡秀雄(役場吏員)が委嘱された。

また同年八月、中村副団長は団員の志気を高揚するため団員二十余名を引率し、余別村まで一泊の徒歩旅行を行なった。(続く)

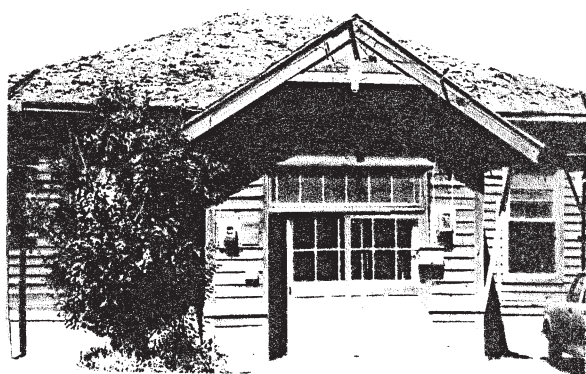
開拓使時代からの 歴史ある建物が消える

明治二年、古平開拓使出張所が置かれましたが、同三年、古平・美国・積丹郡役所となり、浜中村(現在の浜町)に建てられたのがこの建物です。後に公立病院として利用されたこともありましたが、明治三五年から古平町役場となりました。

昭和二年、現在の役場庁舎が新築されると、町内でただ一軒の印刷業を経営する斎藤公作に下付けられました。



↑古平町役場当時の庁舎・玄関左に「古平町役場」の標記がある(大正9年)



← 改修以前の建物・庭木があり昭和四十五年頃と思われる

その後、建員職である西村信一郎さんの所有となり、屋根の葺き替えや修理なども行なわれていましたが、西村さんの転居と老朽化が著しいため、今年の一〇月末に解体処理されてしまいました。古平町内の現存する建物としては、神社を除いて最も古く、歴史のある惜しい建物でした。

郵便

便の輸送は、郵便局から委託された人が郵便物を背負って湯内村(現在の豊浜町)まで行き、そこで余市からの郵便物を受け取って戻ってくる。その仕事を請け負っている人を通送(ていそう)と呼んでいたが、歩き慣れた道とはいえ、かなりの激しい吹雪の日でも往復していた。郵便小包は定期船を利用して、一般の郵便物が定期船を利用するようになったのは戦後のことである。

新聞は郵送は別として、輸送は全て定期船だったので何日も時化が続くような冬の季節は、それこそ新聞が何日分かまとまって、ドサツと配達されることも珍しいことではなかった。

日 用品のほとんどは、小樽へ古平間を往復する運賃積みといわれる運送船に頼っていたので、往々に不足する物資もあったが、まずは日常生活に支障が出るということとはなかった。

大正九年、浜町中村源次郎・梅野角蔵・梅野政治が共同で増毛町から和船共栄丸(二〇ト)を購入

入して、古平へ小樽間の物資輸送を始めた。この船は一本マストに一三馬力の焼玉エンジンを取り付けた発動機船で、小樽まで約六時間で航行した。

共栄丸はそれまでの川崎船より時間が短縮され、運航時刻も正確であったことから利用者も多かった。その後、間もなく共栄丸は梅野政治の所有となり単独

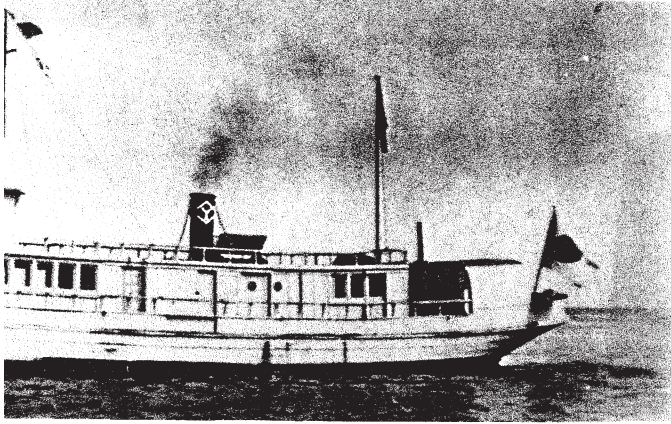
で営業を始めた。

共栄丸は昭和二年二月三日、塩谷海岸で吹雪きのため座礁していた小樽市色内町大西汽船所有の第十一博多丸を発見し、危険をおかして船長江崎定吉外一八人の乗組員の内一四人を救助し(他の四人は自力で上陸)、後に人命救助で表彰された。

古平へ小樽間の運送船は、注

海運

移り変わりと 平〜小樽間の貨客輸送



昭和25年、役目を終え航路から消えた金華丸

文主からの物資を小樽市内で買入れて来て、予め契約している馬車や馬そりなどで配達することもあり、便利さから各船共に運輸を支えるに充分な積荷は確保されていた。

大 正年代から次ぎのような機帆船と発動機船が運航されていた。

機帆船

港丸	沖村	瀬川末彦
砂押丸	港町	笹谷喜太郎
安全丸	港町	本間半之助

発動機船

勇丸	浜町	山田才太郎
長栄丸	港町	本間由太郎
安栄丸	浜町	本間万次郎

安全丸	新地町	渡辺宗作
-----	-----	------

共栄丸	浜町	梅野政治
-----	----	------

共栄丸	浜町	今村登喜治
-----	----	-------

福栄丸	港町	本間三郎
-----	----	------

第二福栄丸	港町	本間光男
-------	----	------

平和丸	港町	本間清吉
-----	----	------

開洋丸	新地町	熊木政次郎
-----	-----	-------

澤山丸	浜町	寺田栄造
-----	----	------

古平丸	浜町	高橋民蔵
-----	----	------

		斎藤清
--	--	-----

これらの運送船は船が古くな

小型漁船の航行には危険が多く、特に冬の季節風に加えて荒天の海では、不幸にも遭難したという辺地での痛ましい不慮の事故を聞くことがあった

乗

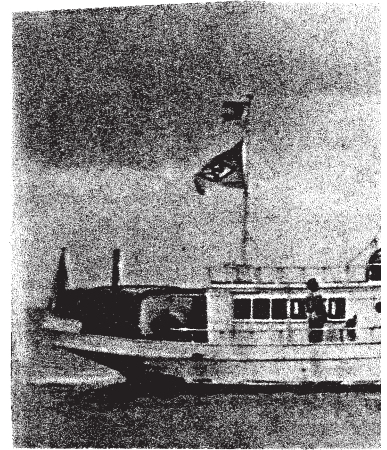
客は季節を問わず多かったが、船が小型であつたため海や天候の状況によつて揺れが激しく、船に慣れない人にとつての船酔いは大変な苦痛でもあつた。夏の海の穏やかな海上は快適な船旅であつても、季節風の強い冬の海は激浪に襲われ、文字通り死ぬ苦しみを味わうという人もまた多かつた。

中にはそんな光景を尻目に悠

早くから古平の海運が盛んだつたのは、鯨漁が第一であつたが、その外にイリコ（干しナマコ）や干しアワビなどが中国向けの特産品として珍重され、北前船によつて多くの鯨製品と共に、これらのものが遠く長崎などへも運ばれたということもある。

当時は港湾や荷役設備の整つた港などは無く、舢（ハシケ）が陸地と停泊している船との間を往復して荷物の積み下ろしをしていた。それで船を波浪から守り、風を遮るような地形が先ず良

冬の荒い波の 夏の快適な



↑ 定

然とタバコをふかしている人もいたが、普段から漁船などに乗っている人にとっては日常のことではなかつたようだ。

やつとの思いでようやく上陸したものの、船酔い気分のまま青

港の条件でもあつた。

明治三二年「北海道港湾の状況」という報告書に、古平港について次のように記されている。

「古平郡の西北岸一帯にわたつて開いている湾を古平湾と言い、古平港はその西にある。

その区域などは詳しくは分らないが、東の歌棄岬から西の丸山岬までの東西約三・二キロ、南北一・六キロの間である。港は余市港と同じく東方に開いている

が湾は深く入り、丸山岬付近から海に連続して突き出ている岩

息吐息でしばらくは人心地に戻らず、おぼつかない足取りで歩く人の姿もいま思ひ出すと懐かしい。

全が定期船運航の第一の信条で、平常の運航での

安

は、三〇ほどにわたつてよく西

北の風を防ぎ、歌棄岬は港の口を押さえるように突き出ているので、東北からの風浪を防ぎ港内は危険の恐れが少ない。殊に西風は強烈に吹いてきても波浪の起こることは無く、停泊する船にとつてはおおむね安全だと言える。これが付近沿岸で唯一の避難港として、船乗りから

称揚されている理由である。

沿岸は砂浜が多いようだが、市街部の海岸は埋立地（杭を立

て内部に板を当てて石垣の代わり

事故は一度も無く、回航や係留中での事故が二、三度あつたことが記録にあるだけである。「今日は船が休みだよ」と、だれかが告げると、町の人は、「今日は天気が悪いとか、悪くなるのかなア。海がシケてるのか……」などとその日の天気を判断し、「スケン船も休んだ」と聞けば、相当な悪天候を予想した。

急ぎの用事のある人は、「定期船休航」という天候の中でも余市まで歩いた。

「今回も浅野さんから蛟龍丸・金華丸の写真をお借りできました。ありがとうございます」

にしている）になつていて、舢や小廻船はここに入つて貨物などの積み下ろしをする。船舶は普通、入船町の沖合い一八〇メートルから三六〇メートルの沖合いに停泊する。」

（抄録・表記は替えています）

昭和八年、築港が出るまでは、漁業者が個人で石垣や矢来（やらい）丸太を縦横に組んで中に石を入れ、波除けや土台にした、小さな築堤などを造り、それらのうち現在でも残っているものを見ることが出来る。



おぼろ

大澤 文子



切れながの目にながしい瞳、笑うと右頬のえくぼが可愛い、まあちゃんは二歳の男の子。

いつも女の子のような声をはりあげ、おばあちゃんの背で調子とり、身体を浮かしながらいくつもの童謡を歌いこなしていた。

♪ からのすの赤ちゃんなぜな
くの こーけこつこのお
ばさんはー

まあちゃんのお得意な歌だった。なんて歌の上手な子なんだろう。垣根越しに聞こえてくる歌声に幾度となく思ったことか。

昭和十四年十一月、結婚したばかりのわが家の新居は住宅街といっても、まだまだその一角のみの札幌市南十二条西十八丁目だった。広々と続く野を横切り藻岩山をのぞむ個所にあった。その隣が早川さんのお宅、早川さんのおじいちゃん、おばあちゃんは人の良さそうな笑顔を浮かべ、いつもぬくぬくと綿の入った半纏を着ていた。

新居に落ち着いた翌日、一番先に知ったのはおばあちゃん達

の可愛いお孫さんが、「まあちゃん」ということだった。

「まあちゃんー！」

まあちゃんを呼ぶおばあちゃんの甘い声が印象的だった。

♪ テルテル坊主ー
テル坊主…

雨模様の日曜日には、朝寝の私達の耳にまあちゃんの歌声が快く聞こえてくるのだった。そ

とと雨戸を開けると、まあちゃんの家が軒先に、白いテルテル坊主が朝風にくるくる廻っていた。まあちゃんは大抵紺の着物を着ていた。歌いながらおばあちゃんの背中でピョンピョンはねると、緑と黄のさんじやくの端が一緒にはねあがる。

♪ 夕焼けこやけで
日が暮れて…

西の空が茜に染まる頃には、きまつて玄関口にまあちゃんの可憐な着物姿が見られた。明るい月の夜にはなかなか寝つかれないまあちゃんを背に、おばあちゃんの歌声は、

♪ 十五夜お月さんごきげん
さーん、ばあやはおいと
まとりましたア…

細く悲しく路地を流れてゆくのだった。

わが家にも四年ぶりに長男が生まれた。まあちゃんは五歳のやんちゃ盛りとなった。もうおばあちゃんの背におぶさることもなく、庭の梅の太木によじのぼり、おばあちゃんをハラハラさせる姿も折々見かけることがあった。

♪ お山のお猿はまりが好き
トントンまりつきや

おどりだすー

大枝にまたがり身ぶり手ぶりで歌っている。そんな時、

「まあちゃん危ない！」
おばあちゃんの叫ぶような声が庭いっぱいひびきわたるのだった。

あれから数年後…大東亜戦争は酷となった。日に次ぎ空襲警報発令が度々となり、私は長男長女の幼な子を抱え防空壕を出たり入ったり…

そして終戦…そして…

あれは確か昭和五十四年四月頃だったであろう。夫の発案で元の家の辺りを家族で散策して見ようという。四十一年前のわが家の辺りに足を運んだ夫は、

「あつ！」

突然低い叫び声をあげ、踵を返すと角をまがり小路に入る。

「あつ」、少し黒ずんだ感じはするが、まぎれもなくわがふたりの子らと暮らした家！ わが家のあと！ 思わず駆け寄る。下半分はモルタル造りに変わり車庫もあった。その隣は北海道大学を卒業してすぐ出征され、アツツ島で戦死されたと聞く五十嵐さんのお宅、残された母親は…言葉もなく立ち止まる。と、突然！

「やあ、大澤さんでしよう！」
男の子を連れた青年が叫ぶようにひとこと、ビクツとして振り向く。

「えっ！えっ！ あなたがまあちゃん！」
遠い日の面影もなく、立派な青年、

「テレビ見えますよ！」

突然、長男に声をかけられ、

「あつありがとう」

慌てて長男は、まあちゃんより少し高い背をまげ挨拶をする。

思わず私の口から出た言葉は、

「あのうおばあちゃんは？」

まあちゃんは大声で笑う、

「いま生きていたらオバケでしょう」…と。

うーんあれから何年か…

私はこの真夜、窓にふるるかすかな雪音に耳をかしながら原稿紙にむかっていた。

札幌通信 第36信

自分中心に地球は回らない

吉 川 義 雄

遅い、遅いこと、内心喜びながらも、降雪のないことを話題にしていたら、十二月に入つてすぐに、朝の光りの中で、白い世界が鮮やかに輝いていた。

予定通りなのに、「さアさア」と、娘二人に急がされ、服装も改めさせられて病院行きの車に乗せられた。

今年の四月に検査して以来だから、随分ご無沙汰をしていたことにもなるが、格別悪いところもないから、私の方はいたつてのんびりしているのは当然だ。

しかし、娘達はそれが気に入らない程、心配のタネが日毎に拡大しているらしい。無理もない、ついこの間(十月)入院してほんの十数日で、私の妻、彼女達の母がアツサリ亡くなつてしまつていたのだ。

ようやく涙の乾いた目に映つた

のは、口ばかり達者でも、ヨタヨタしている私の存在であつたようだ。

妻の生きている頃、私の脳梗塞が発見され、二十日程の入院でアツサリ退院した病歴があるが、その後、左足を多少引きずる程度で、いたつて元気であることに相違はない。

私より七つも若いのに、私より先に逝つてしまつた。と、妻に文句を言いながらベソをかき続け、氣付いてみると今日で七十日も経つていようだ。

随分混み合う病院ではあるが、私を待つていてくれたように検査は優先して進められ、久方なつかしいMRIに横になり、「この器械は、イモアライと言つたつねア……」

と、同病の友がつけたウマイアダ

名を思い出し、ほんの少し昔を思い出している内に、アツサリ終つた。

診察室で、四枚のフィルムを仔細に調べて主治医が、多少固唾をのむ思いでのぞきこんでいる私に、

「悪いところは何もない」と、あつさり宣告した。

帰路、二人の娘は、やたら車内でオシャベリになつた。雪はほとんど消え失せ、街は気のせいかな春がやつて来たような陽気である。

新年の賀状は出せぬ身だから、その旨を述べた『喪中はがき』を、早々に出したからたまらない。電話のベルが鳴ると、妻の死の詳細を尋ねられた。

うれしいことには、誰も彼も身内の亡くなった思いを述べられ、私の身を心配して下さることだ。

余市の河端邦子さんは、すぐ最近、弟さんを亡くしたばかりとか、古平衆のうれしさは、わが身の悲しさを踏みしだいて、他の悲しみに満腔の想いを寄せ

て下さることだ。

ほんの少し前、娘のところに二人の夫人が訪ねて来て下さつた。氣付いてみると、一人は若くして難病の夫に死別して、二人の子供を立派に成人させているし、今ひとり、十数年も夫を入院させて、これも子供二人を成人させている。

「二人の夫は、私も妻もよく知つていて、後々、病氣や若くしての死など、思いも寄らぬ好男子達であつた。

人の世の総てを悟つた釈尊は、人の世の在りようを「生・老・病・死」と、コトもなげに言つてのけた。この範疇から逃れられる生命なぞはない。

宇宙は、瞬時も静止することはない。生老病死が断固たる法則なら、イヤでもまた生まれて来ることに相違はない。

生老病死の中味を大切にしよう。十界も、十界互具もあるのに、その中の悲しみばかりに浸つていけるわけにもゆくまい。

戦中 中彈

泣き笑いの
樺太漁場体験記

戦後 後彈

吉 野 慶 一 郎

今朝、早々と出漁したはずの船頭が突然戻つて来て、

「大変なことになった。沿岸警備隊長が船に来て、『吉野サンこの船は今日から出漁を差し止める。許可があるまで沖へ行くナ』と言った。それでその理由は？ と聞くと『詳しいことは船主にする。帰って船主にすぐ出頭するように伝えること』と言われて、急いで戻つて来た」

とのことで、船頭もすっかり心配顔で話でした。

これは何事なのか、一抹の不安を感じながらも、言われるままに隊長の許へ行きました。

「いったい今朝の出漁禁止命令はなぜなのか」

と尋ねたところ、

「それ、密航で北海道へ逃げ

るといふ疑いがあるからだ」

まことに簡単な答えでした。私は素知らぬふりをして、

「そのことは前にも話したとおりで、私も北海道へ逃げて行くなど全く考えてもない。終戦後も漁業を続けて、今年も鯨場をやりソ連に協力しているではないか。逃げるなどということとは絶対にしない」

と強い口調で抗議しました。すると、途端に隊長はニヤリと笑顔になり、

「吉野サン本人は逃げて行くよな人ではないが、どうも船が怪しい。なぜなら、今の船頭は昨年別の船で一度密航して、海馬島で捕まったという前歴がある要注意人物だからです。この船頭はどうも信用できません」と言うのです。そこで私は、

「それでは、どうすれば隊長の気がすむというのか。では絶対逃げないという船頭と取り替えればいいのか」

と念を押すと、即座に、

「そのとおり——」

まるで勝ち誇つたような顔をしながら言うのです。

「それでは仕方がない。船頭を取り替えましょう」

と、約束をし帰宅しました。

帰って、船頭に隊長との話を伝えたところ、すでに船頭も隊長から同じことを言われていたとのことでした。船頭は、

「このままでは親方に迷惑がかりますから、別の船頭を頼んで下さい」

とのことでした。

大変残念なことですが、この際お互いに辛抱することを話し合い、これからは強く生きていこうと言って別れました。

早速、次の船頭を探さなくてはなりませんでしたが、幸いにも適任者を見つけたことができた。隊長に報告して了承も

得られ、これでようやく元の出漁許可も下りて、先ずはとにかく

く一件落着となりました。

しかし、思わぬことから隊長の命で船頭を替えなければならなくなつたという、何とも後味の悪い思いだけが残りました。

気持ちのすっきりしない中で、前途に何か不安を感じないわけにはいきませんでした。

関連がありますので、ここで話は少しさかのぼりますが……

今年の鯨場の真最中に、戦後、旧拓殖銀行を接収したソ連国立銀行から書面で、「至急出頭せよ。応じない場合には真岡検事局送りの事件になる」

などという、まさに脅迫状みたいな文面に、あつけにとられながらも出頭しました。

行つてみると、支店長（ソ連人）と通訳（日本人）の二人がいて、話の内容というのは、

「拓殖銀行の帳簿を調べた結果、吉野さんには貸し付けた残高があります。これを至急返済して下さい。これが今日の要件です」

と突然言われ、思いもしないことなのでこれにはビックリしました。

(続く)

師走川陣地陥落

北極山へ撤退―続く

久し振りに兵舎の中で武装したまま寝台に横になったが、明日以降のことを考

えると、目が冴えてなかなか寝つくことができない。

飛行機もない、戦車もない、大きな大砲もない近代戦など到底考えられない。

日露戦争当時の兵器とあまり代わりばえのしない、鉄砲だけで戦わなくてはならない。いったいどうなっているんだろうと言いたい。

もはや長い命ではない。パツと潔く、男らしく散ってゆくか。ふと故郷の祖父母や父母、兄弟や妹のことを思い出し、もう逢えないかも知れない、死ぬ前に一度だけでいい、みんなと逢って、そ

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

36 橘 義 春

れからあの青い海を見て、家の裏の子供の頃から親しんだ、三角の形のいい、緑一色の丸山をじっくり眺めてからなどと、出来もしないことを思

っていたらいつの間にか深い眠りに入っていた。

八月一五日敵戦車

古上市内へ侵入

敵は早朝から攻撃を開始した。特に一号兵舎付近の三中隊に對し猛烈な攻撃を仕掛けてきた。

古屯はわが軍の食糧、弾薬の貯蔵と補給地でそれを目けて敵は続々と兵力の増強を始めた。無意加から栗山道を経由して進攻してきたものと思われた。

ソ連軍は自走砲、カチューシャ砲など

一〇数門、戦車五〇数輛をもつ機甲部隊と千数百にんからなる大部隊で、一挙にわが軍の陣地を攻略しようとしたらしい。

午前九時、小林大隊長は各隊を集合させた。急いで銃を持って兵舎前の野菜畑に集合したら、大隊長が栗毛の馬にまたがり赤い顔をして敵の方向をにらんでいた。私は危ないなと思つた。馬などに乗っていたらすぐ敵の狙撃兵の標的にされる。なぜ誰も止めなくなる人がいないのか不思議だった。

後で聞いた話では、大隊長が馬に乗り指揮したい、というのを副官が必死になって止めたが大隊長は副官を拝むようにして「これが最後だから馬に乗せてくれ」と言い、コップの酒をうまそうに飲んでいたという。大隊長は部隊先頭に立つて敵陣に突入する覚悟をすでにかためていたのだった。

整列した兵隊達は皆緊張していた。大隊長は、

「これからわれわれ第一大隊は全員敵の中へ突入する。生き残ったものは八方山の連隊本部へ行き状況を報告せよ」

こんな意味の訓示であった。訓示が終わると宮城を選擇し、それぞれが故郷の肉親に別れを告

げた、途端、体が小刻みに震えてきた。なにも私ばかりではないようだ。真つ青な顔をしている者もいる。みんな人間だ。死を前にしたらこうなるのが当然だ。死に直面して平然としているヤツはどこか狂っているとか言いようがない。

私は若かったし独り身だが、故郷に奥さんや子供のいる人はどんな心境だったのだろう。自分が死んだ後の家族の嘆き、その後にくる苦勞を考えたとき、死んでも死に切れない思いだったのではないだろうか。

訓示が終わり解散になる前に、連隊本部から電話がかかってきて解散は中断した。

皆はいよいよ来るものが来たぞと、階級章をはずして捨て、突撃の準備を始めた。四斗樽のかがみが抜かれ、飯盒のふたで最後の別れの酒を酌み交わした。酒が入るといつの間にか皆元気になる、

「さあどこからでも来い！」とばかり、意気天を衝くとはまさにこのことだ。



古平俳句会

古平の海荒るゝとも鰯の旬 斉藤波留

庭に敷く落葉に風情あるものを 山口悦子

北きつね山道はばむ光放つ 越野敏雄

茸汁飛ぶ様に売れ屋台かな 大和田絵伊

くれなるの秋の夕暮車窓より 高橋重子

菊人形勧進帳も義経も 仲谷比呂古

髪付けの香を放ち舞ふ文化の日 室谷弘子

初雪に遊び疲れし孫眠る 泉清三

紅葉を浮かべて走る里の川 外山俊久

小春日の神威岬に翳る海 渡辺嘉之

湾揺るる外来船や冬波止場 堀典子

海荒れの積丹沖の鮪釣る 本間寿昭

松籟の影のゆらめき暮の秋 越野清治

古平町内には数多くの文学碑があつて散策する人を楽しませてくれますが、歌碑は二基しかありません。今月は古平短歌会がお休みですので、歌碑の紹介をします。

秋田岳轉和尚歌碑

古平の岸打つ波はみなかみの

観音滝へびくなくなるらん

禅源寺住職の岳轉和尚は、泥の木川上流の滝を見て『観音滝』と命名し、この景勝の地に観音滝霊場を開きました。大正一三年一月一七日、観音像をまつて開眼法要を行ない、滝を眺める高台に歌碑を建てたのです。

そして、歌碑の由来については次ぎのように述べています。

「古い昔より、平和の土地は観音の浄土なり。その平和の土地にも、時々思想悪化の岸打つ浪風の立つ事あれば、水の上に霊

座まします観世音へ信仰の響きを捧げ、滝の水は陸に注ぎては豊作となり、大海に侵入しては豊漁満足となり、永久平和の幸福を祈る意なり」

以後、毎年この一〇月一七日を法要の日としています。町内の人々からは観音まつりの日として一般にも親しまれ、秋の行楽の一日を楽しむ人達で賑わっていました。充分に車の通れる道路でしたが現在道路も荒れ、『クマ注意』の標識もあつて訪れる人も途絶えています。深山の雰囲気が残っています。山水の景勝だけが残っています。

古平町の上水道は、この観音滝上流から取水しています。

← 観音滝霊場の高台、樹林の中にひっそりと建つ秋田岳轉和尚歌碑



純粹と言へるは常にさびしかり降り積む雪のま白きさへも
 カラスの足あとと写る鏡にみづからを励ますごとく唇に紅ひく
 若からむ肌のいまだに湯をはじき身を浴室の鏡に写す
 過ぎし日のこの刻に逝きし父なりと降る雪に暗む窓に佇ちゐつ
 直会に亡き父を語る老いありて心寄りゆき離れがたかり

徒然に

瀧 内 優 子

父の回向終へ来て冬の衣を脱げば淡あわと香の部屋にただよふ
 子が送りくれし搔卷に目をとづる夜をふかぶかと雪は降りつぐ
 事故死せる娘の事故夢に見たる夜を頻り犬の遠吠えしをり
 こらへ得る限度にありてま二つに断ち割るレモン固く絞りつ
 ふたたびは戻らぬ時と責めらるるごと秒針の音を聞きをり

編集雑記

▽冬至が過ぎると日脚も伸びて
 “一陽来復”といきたいのですが、
 北国ではこれからがいよいよ冬本
 番、「平年より雪は多め」という予
 報が報じられています。むかしは
 冬至にカボチャを食べるのが慣わ
 しでしたが、ケーキを食べるのが
 現代風のようなです。

▽去る一二月初め東京古平会が
 催されました。ある日、高橋洋さ
 んがわざわざ訪ねて来られ、
 “近々に東京古平会があるので、
 古平に関係したものが懐かしいの
 と聞いております。

でほしい」と。また池田由久さんか
 らも電話があり、「東京にいますと
 何かにつけふるさととことが思い
 出される。古平会があるので、何
 かあれば集まった皆さんも喜びま
 す」とのことでした。

定期船の頃は、津軽の海を越え
 るというのは大旅行でした。今は
 交通が便利で、ひとつ飛び……で
 すが、やはりふるさとへの思いは
 ひとしおのようです。古平からは、
 たらつり節に本間礼子さんも遠路
 出演され、古平会は大盛況だった
 と聞いております。

せたかむい 200号 原稿募集

【せたかむい】が、5月で200号を迎えます。
 これを一区切りとして、皆さんから原稿を寄せて
 いただき記念号を計画しています。次の要領で皆
 様からのご応募をお待ちしております。

- ◆自由としますが、古平のまちに関連したこ
 とで、むかしのこと、体験談など歓迎します。
- ◆長さは自由ですが、原稿用紙で4枚以内とし
 ます。便箋（びんせん）でも同じ枚数
- ◆文章はなるべくやさしく、漢字は新聞を参考
 にして下さい。
- ◆しめ切り 1月31日（火）

原稿は、文化会館内・町史編さん室へお持ち
 下さるか、または郵送して下さい。

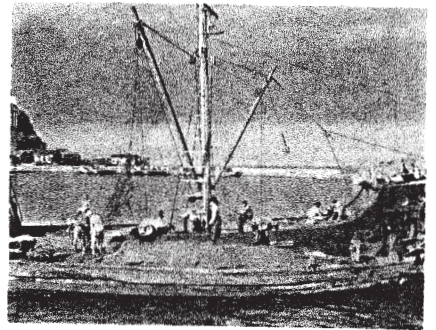
? お尋ねは 42-2590（内線65）
 町史編さん室へどうぞ

古平町史年表

昭和 17 年 (1942) ~ 続 く

- ▲古平国民学校児童が、古平川の洪水で埋まった軍人遺家族の水田の石拾いを手伝う
- ▲古平町農会が農耕馬を池田町馬市から購入する
- ▲古平信用組合主催の伊勢神宮参詣団が出発する
- ▲余市町のリンゴの袋掛けに女子勤労奉仕隊が動員される
- ▲石炭増産のため夕張炭鉱へ挺身隊が動員される
- ▲古平報徳会で招聘した鈴木医師が浜町に医院を開業する
- ▲焼夷弾に対する防空訓練や、夜間の灯火管制が定期的に行われるようになる
- ▲稲倉石鉱山が6万ボルトの変電所を現地に新設する
- ▲古平町が軍用としてウサギの飼育繁殖を図るため、繁殖用ウサギを飼育農家や業者に配布する
- ▲商業関係者を中心として勤労報国隊が結成され琴平神社で祈願祭を行い、稲倉石鉱山や鉱石の積み込み作業に動員される
- ▲祝聖会と婦人会が共催し、禅源寺観音堂で出征兵士武運長久祈願、終わって神仏参りをする
- ▲大日本婦人会古平分会総会が古平国民学校で開かれる
- ▲後志青年錬成大会が倶知安町で開かれ、古平青年団もこれに参加する
- ▲婦美方面から来たトラックが美国町の坂道から転落し、2人が死亡する
- ▲国民体育法により乳幼児の体力検査が行われる
- ▲古平町農会主催の第1回蔬菜品評会が開かれる
- ▲二宮金次郎の銅像や奉安殿の鉄柵などを、金属回収令により供出する
- ▲浜町1条通りで夕方火災があり、2戸を焼失する
- ▲道内の新聞が合併して北海道新聞が創刊される
- ▲古平青年学校が、15日間の特別訓練を行う
- ▲古平信用組合が入船支所を開設し、信用事業のみを行う
- ▲庁令により古平警察署(ほか6警察署)が廃止になる。余市警察署に併合され、古平警部補派出所・浜町巡査駐在所となる

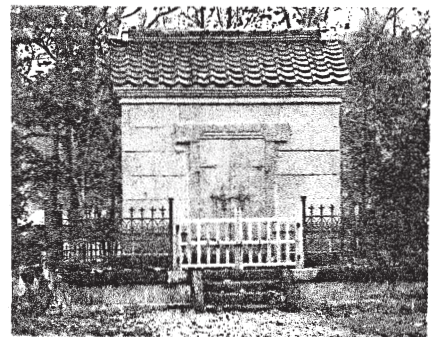
港町高台に建つ古平警察署庁舎 →
昭和 24 年 5 月の大火で全焼する



↑ 本船へ鉱石の積み込み作業



↑ 石像に代わった金次郎の像



↑ 奉安殿(ほうあんてん)? てなアに……と、思う人もいるでしょうね

